

「但馬むしの会」成立の 経緯と今後の展望

谷角素彦・遠藤知二

成立の経緯

この会を構成する若いメンバーの多くは、かつて豊岡高校生物部員であった者である。筆者のひとりが豊高2年生だったある日の放課後、但馬文教府のある妙楽寺でネットを振っていたとき、同じようにネット片手に蝶を採集している人と出会った。それが木下さんであった。この出会いが、この会設立の大きな契機になっているように思われる。

木下さんの長年の貴重な標本データを前にして、またその他にも蝶をやっている人のことを耳にはさんだりしていたこともあって、何とかこねりのデータをひとつのまとまったものにすることはできないだろうか、こねりの共通の趣味を持った人たちと交流できる場があれば、どんなに素晴らしいだろうかということ、「会」が意識の中に浮かび上がったのである。こういうことは以前からも感じており、何人かの生物部員の間では話したこともあったが、現実味を増すものとなったのは、この頃からである。

しかし、会設立のための具体的な動きは遅々としてはかどらなかつた。その原因としては、まずメンバーとなるべき各人が日本各地に分散しており、そのうえ各人の仕事なり学校なりに縛られて、なかなかメンバーが一同に会して実のある相談ができなかつたことである。が、もっとも大きくわかれわかれにのしかかつたのは、それよりも会の性質、形態、趣旨をどのようなものにするかという問題であった。対象を「蝶」だけにしぼる、「昆虫」にする、「生物」にまで広げる、それぞれに批判があつた。また、自然保護との係りをどうするか、などなど。

複数人間かひとつの共通の会をつくってやっていこ

ラとするのであるから、そこには問題が生じ、困難がつきまとうのは当然のことである。会の運営は、方向づけを以て軌道にのせるまでがひとつの大きな難関だ。現在のメンバーは、蝶をはじめとして昆虫中心であるから、当面は但馬の昆虫相を明らかにしていくことを活動の重点として、まず会誌を出そうということになった。この創刊号の出版により、やっと第一歩を踏んだところである。見切り発車であつたかも知れないが、活動の確かな足掛かりが出来たように思う。今後、そこからさらに一歩一歩より内容の深いものに、また活動の枠を拡げる柔軟性をもって進展させていかねばならないであらう。

今後の展望

さて、このような経緯を踏まえて、ようやく会誌の出版にまでこぎつけた但馬むしの会ではあるが、出発の当初から多くの問題を抱え、まだまだ暗黒線の状態である。しかし、ひとりひとりの抱負や展望がなければこの問題が解決され得ないだろうし、またこの積極的な姿勢のみが問題を進展させ得るといってよいだろう。具体的には今後どのような立場から、どのように発展させていくかを、発端から会の設立にかかわってきた者のひとりとして述べてみたい。

《地方性に根ざすこと》 「むしの会」、「昆虫愛好会」といった同好会組織は、全国にそれこそ数多くあるだろう。その意味からいえば、わかれわかれの会も「またむしの会!」ということでは終わってしまいかねない。けれども、それぞれ地域にはそれぞれの昆虫相があるように、それぞれ地域にそれぞれの同好会があることは決して意味のないことではない。海外とまでいわずとも、はるばると遠征して採集旅行を繰り返さずとも、その成果を誇る同好会の風潮は今なお一方ではよく見受けるが、それはおそろしく皮相を知見しかもたらさない。ある地域の昆虫相を調べるのは非常に時間と労力を要することだが、それが最も可能なのは、なんといってもその地域に住む人間である。身近なフィールドを選び、そこで地道な研究を

檔案に類を重ねることの方がはるかに重要であり、貴重で
 なく、徹底して地方性に根ざしてこそ、地方の昆虫同
 好会組織の存在意義は高まるものと思う。

《自然保護とのかかわり》

徹底して地方性に根ざすこと、それはまた地域そのもの
 のを、虫を愛し自然を愛するものの目で見直すことにも
 つながろう。筆者のひとり、現在六甲山麓の一角、西
 宮に住んでいるが、かつて昆虫の宝庫といわれた六甲は
 今やその面影を偲ぶべくもなく、山上には車と人とゴミ
 の山ばかりである。それに比べれば但馬には自然がまだ
 豊かに残っているとはいえるものの、鉢伏などでは既に六
 甲に近い姿となってしまう。

それではわたわたはどらすれば良いのか。わたわたの
 行なう採集は、一方ではその虫の生息地が非常に限定さ
 れていたり、個体数が少ないようなばあ、与える影響
 も小さくないだろう。その限りにおいては採集は充分に
 考慮されなければならぬし、濫獲は厳に慎まねばなら
 ぬ。しかし、また一方では「虫屋」や自然を愛する者
 ほど、自然の変化に敏感な人種はいないと思う。あつ川
 べりにいたトンボが護岸工事のために姿を消してしまっ
 たとか、こここの山にはこんなむしがいたのに伐採が
 すすんで随分減ってしまったとか、こういうことをわたわたが
 言わないで誰が言えるだろう。

幸いにしても但馬には兵庫県自然保護協会の支部がある。
 この支部とも手を組んで、自然破壊の脅威と対抗するた
 めに、今のうちには但馬の生物相をできるだけ明らかにす
 るべく努力を続けることは、わたわたのひとりの使命と
 いってよいだろう。そのためには「虫屋」といえるとも
 申しただけを見るのではなく、広い視野をもつことが要
 求されるだろうし、またわたわたの立場からの発言権を
 得ていかねばならぬのではないだろうか。

《会のあり方について》

今述べたように、自然を守る一助として自然が失われ
 る前に但馬の昆虫相を明らかにすることが、まずもつ
 てわたわたの最大の課題である。とはいえ、全昆虫相の
 解明などという不可能事であるし、設備もなければ

料もない中で——だからこそやりがいはある！——われわれはできる限りのことを着実にやっけていくしかない。但馬のむしについての知識をひとつでも増やすことこそ、われわれの目的としてさしつかえのないだろう。

それとともに、むしとのつき合い、生きもののつき合いを通して自然への理解を深めていくことも、それぞれの個人にとって大切なことだろう。それほいろいろなつき合い方があるに違いないし、理解の仕方もさまざまだろう。野山を歩き回るだけでいいという方法もあるだろう。じっくり腰を落着けて何事かを探ってやろうという方法もあるだろう。いろいろな方法が考えられてよい。その中で自分なりのテーマが発見されようし、自然のより深い理解も可能となろう。そうして、それらのテーマについての研究や考えが、この会誌に発表されてはじめてこの「IRATSUME」も生きてくる。「IRATSUME」を媒体に、会員相互の自由で独創的な研究や意見の交換がなされることを期待してやまない。

《おわりに》

さてしかし、地方性を重視せよとはいうものの、筆者ら他が既に地元を離れてしまっているという状況は、大きな制約となる。今後は、同好者が現われるのを待ち、また積極的に呼びかけていって、但馬在住の会員を増やすように加りたい。

さらに「むしの会」として出発したけれども、ゆくゆくはむしに限らず、他の動物でも、植物でも、生きものの自然に興味ある人には広く開かれた会にしていきたいと考えている。

そのためにも、まずはわれわれ自身が実力をつけていかねばならない。その点、身近には緑豊かな自然が控えている。これを活かすことは、いわゆる地方に住む人間の特権でもある。この特権だけは、いくらでも行使して構わないのだから。

(たにかど もとひこ / えんどら ともし・学生)
(前半を谷角が、後半を遠藤がそれぞれ主に執筆した)